

「大阪・関西万博 日本館」の整備にあたり UDワークショップを運営して

小山 満¹

¹ 近畿地方整備局 営繕部 保全指導・監督室（〒540-8586 大阪府大阪市中央区大手前 3-1-41）

近畿地方整備局営繕部は、大阪・関西万博において「日本館」の設計・施工を担った。日本館の建物整備において、博覧会協会のユニバーサルデザインガイドラインを踏まえ、より良いユニバーサルデザインの実現を目指して、営繕部では「大阪・関西万博日本館（仮称）UDワークショップ」を設置した。設計・施工の各段階でテーマ毎に具体的な提案を行い、きめ細かく意見交換を図った。その結果として、実際に設計・施工へ反映するなどの成果が得られた一方で、課題も明らかとなった。本論文は、UDワークショップを設置し運営することにより得られた成果及び知見などについて報告する。

キーワード ユニバーサルデザイン、ワークショップ、当事者参画

1. はじめに

2025年4月13日から2025年10月13日まで大阪・夢洲で開催された大阪・関西万博のパビリオンの日本館の建物の設計・施工を、経済産業省から依頼を受け、近畿地方整備局営繕部が実施した。日本館は「いのちと、いのちの、あいだに -Between Lives-」をテーマとした施設として計画され、大阪・関西万博の主要施設として位置づけられた。

本事業における「大阪・関西万博日本館（仮称）UDワークショップ」（以下、UDWSという。）は、「施設整備に関するユニバーサルデザインガイドライン【改定版】（民間パビリオン用）」（公益社団法人2025年日本国際博覧会協会）¹⁾（以下、UDガイドラインという。）に示された「障がい当事者等の参画による評価と意見反映 ～ユニバーサルデザインワークショップの積極的奨励～」に基づき、障がい当事者および学識経験者の参画の下、設置した。

設計段階、施工段階の延べ2年半の間に合計11回開催し、基本設計段階から障がい当事者および学識経験者に意見を伺い、設計・施工内容に反映した。実践的な知見を得ることができた一方で、今後の施設整備に向けた課題も明らかとなった。

本論文では、設計・施工段階において実施されたUDWSを運営した成果を分析し、今後の官庁施設整備へ活かすことを見据えて、ワークショップのあり方について報告する。

2. 建築概要

建物概要（写真-1）

建設地：大阪府大阪市此花区夢洲東1丁目

主体構造：鉄骨造（CLT耐震壁）

敷地面積：約12,950㎡

延べ面積：約11,192㎡

建築面積：約8,200㎡

規模：地上2階建

最高高さ：約13.2m

着工：2023（令和5）年9月

竣工：2025（令和7）年2月

発注者：国土交通省

近畿地方整備局（建築工事）

設計者：株式会社日建設計

施工者：清水建設株式会社

※日本館の展示の設計・施工及び施設運営は、経済産業省より委託を受けた博覧会協会が業務発注を行い実施した。近畿地方整備局が担う建物の整備と博覧会協会が担う展示・運営が密接に関連することから、設計・施工段階を通じて総合調整会議等の様々な機会を設けて連携を図る必要があった。

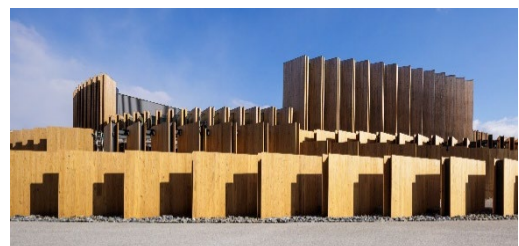


写真-1 大阪・関西万博「日本館」全景

3. UDWSの実施概要

UDWSは、基本設計段階より障がい当事者及び学識経験者と意見交換を行い、抽出した意見を施設整備に反映することにより、誰もが使いやすいユニバーサルデザインを具現化することを目的として設置した。

構成メンバーは表-1の通りである。

表-1 日本館 UDWS 構成メンバー

	設計段階	施工段階
事務局	近畿地方整備局	
学識経験者	7名	3名
車いす使用者	7名	7名
視覚障がい者	4名	4名
聴覚障がい者	3名	3名
知的・精神・発達障がい者	5名	3名
LGBTQ	2名	2名
子育て団体代表	2名	2名
合計	30名	24名

近畿地方整備局営繕部は事務局としてUDWSの運営を担った。特に、適切で円滑な運営及び寄せられた意見や検討結果を整理し、設計・施工段階での反映に向けた調整に注力した。また、専門用語や設計内容を分かりやすく補足説明し、参加者が理解しやすい環境づくりに努めた。さらに、多様な立場から寄せられる意見について論点ごとに整理し、設計者との共有を図ることで、設計・施工への反映に向けた橋渡し役を担った。

UDWSは、設計段階の2022年6月から2022年12月に全6回、施工段階の2023年12月から2025年2月までの全5回の合計11回開催し、Webと対面を併用した会議形式を基本としつつ、設計段階では展示内容や観覧ルートが未確定で参加者へ提供できる情報が限られる中、対象ごとに段階的にワークショップを実施するとともに、他施設の視察等を通じて理解促進を図った。また、施工段階では原寸大模型（以下、モックアップという。）やショールームを活用した検証を行うなど、段階に応じた手法により意見の具体化を図った。

4. UDWSで整理した考え方

設計・施工段階で様々な意見が出されたが、本UDWSにおいては特に以下の3項目について重点的に議論を行い、設計・施工内容へ反映した。

(1) 日本館におけるユニバーサルデザインの基本的な考え方

UDガイドラインの必要最低限の基準を満たすだけでなく、推奨事項も積極的に取り入れることとして、大阪・関西万博を訪れる世界中の人々が利用しやすいユニバーサルデザインを基本とした。

また、日本館のユニバーサルデザインの着眼点として、日本館への来場者誰もが一緒に移動し、同じ空間を楽しめるように、入口から建物内のスロープ、通路において必要な設備を設置するとともに、人による誘導を充実させ、シームレスな移動のための誘導案内を行うものとする基本的な考え方を整理した。

(2) 来場者の移動・誘導方法

日本館は、円形の回廊を一方通行で人々の交差、混雑を避ける人の流れを前提としている。来場者は一筆書きで移動することから、誘導に有効な手すりと共に手すりの下部に視覚障がい者が白杖を沿わせて移動方向を確認できる「レールガイド」とレールガイドが途切れる通路横断部に金属の高さ3mmの突起を敷設して連続性を確保する「ラインガイド」と呼ばれる誘導設備を床面に配置した。（写真-2）

スロープ、踊り場ともにUDガイドラインの推奨レベルを前提に設計を行い、スロープは勾配1/20を基本として、高低差500mmごとに踊り場を設けるとともに、移動時の負担を軽減すべく概ね20m～30m間隔で平場を設け、それらを視覚的に明確に認識できるようにした。

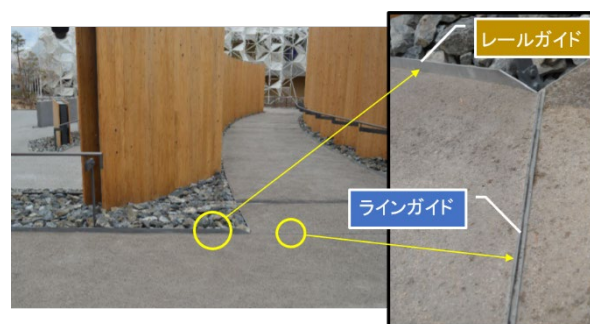


写真-2 レールガイド、ラインガイド

(3) トイレの配置・設備

日本館には、合計4つのゾーンにトイレが設置され、機能分散を日本館全体で捉えて設置した。男女トイレ、大きめの多目的便所の組合せの他に、手洗いを含めた個室型トイレのエリア、感覚過敏や精神的な不安等を感じた利用者が一時的に気持ちを落ち着かせるための空間としてカームダウン・クールダウンルームや授乳室と組合せた大きめのトイレのエリアを設置した。（表-2）

各エリア内の設備配置のほか、光で非常警報を知らせるフラッシュランプやトイレ内の色、デザイン及びコントラストを検証した。

表-2 トイレのゾーンごとの分類

ゾーンA・C	従来型の男女別トイレ
ゾーンB	個室型の男女共用便所
ゾーンD	ファミリー利用・介護利用に配慮した大きめトイレ （授乳室、カームダウン・クールダウンルーム併設）

5. UDWSの成果

UDWS では、設計段階、施工段階を通して頂いた多数の意見に対して、よりよい解決策を目指して模索した。成果として5点挙げられる。

(1) 多様な当事者の意見を反映

多様で多数の当事者参画による UDWS を実現できた。それぞれの立場から多岐に渡る意見が出され、当事者・設計者・事務局間で意見交換を行い、寄せられた意見に対して提案を行い、調整の上で整備内容に反映することができた。

例えば、レールガイド・ラインガイドについては、視覚障がい当事者から誘導機能の向上を求める意見がある一方、高齢者等のつまずきの懸念が示された。UDWS では多様な当事者の意見を踏まえて議論を行い、視覚障がい者が判別できる最低限の高さとして整備内容へ反映した。

また、基本設計という早い段階から当事者の意見を反映することで、より質の高い施設が実現できた。

(2) モックアップ等検証の有効性の確認

モックアップ等実物を用いた検証を行うことで、問題点や有効性を当事者と施設整備側で共通認識を持つことができ、意見のすり合わせを円滑に進めることができた。

特に、空間の大きさや色のコントラスト、仕上げの素材感等については実物を体感しないと出てこない意見があった。

(3) 先進的なユニバーサルデザインの採用

個室ブース型トイレやファミリー利用や介護利用を想定した大きめのトイレなどを組合せ、利用者の属性や利用目的に応じた多様な選択肢を提供する機能分散型のトイレ計画とするなど先進的な考え方に基づくモデルが実現できた。

(4) UDWS 運営のノウハウの獲得

多様な障がい当事者が参画する UDWS の運営を通じて、実践的な運営ノウハウを習得できた。

例えば、事務局に建築設計とユニバーサルデザインの知識を有したメンバーを構成し、事業者と当事者の間で公平中立な立場でもって意見の引き出しや論点の整理を行い、適切なワークショップ運営が実現できた。

また、事務局である近畿地方整備局の HP で日本館 UDWS の開催概要を掲載し、参画メンバーだけではなくユニバーサルデザインに携わる人々へ取組内容を広く共有・公表することができた。

(5) 博覧会会場の他の UDWS との連携

並行して実施された他のパビリオンの UDWS と共通する課題等の情報共有や連携を行うことで、相互に UDWS の最適化を図ることができた。

6. 今後のワークショップのあり方の考察

本ワークショップは目的に対して一定の成果を得ることができ、UDWS の運営に関する実践的な知見を得ることができた。一方で、運営上の反省点や今後検討すべき課題も露呈された。以下、それらを踏まえた今後のあり方について4つの観点から考察する。

(1) ハードとソフトの一体的な意見交換

日本館は、近畿地方整備局が建物の整備（ハード面）、経済産業省及び博覧会協会が展示・運営（ソフト面）という役割分担の下、整備を進めた。整備の進捗として展示・運営計画が後追いとなる部分が多く、結果として日本館 UDWS では建物の整備に係る部分が議論の中心となった。しかしながら、パビリオンの利用者にハードとソフトの区別はなく、本 UDWS の意見でも、ハードとソフト両面から取り組むべきという指摘もあった。当初からハードとソフトが一体的に議論できる UDWS の運営が必要であり、そのための横断的な枠組みの構築が必要不可欠である。

(2) 効果検証の必要性

今回は日本館の運用上、UDWS メンバーが自主的に実施した事後評価を除き、運用段階の検証は実現できなかった。施設完成後の運用段階において、UDWS で提案され実施した内容が想定通りの効果を発揮しているか、また、想定外の問題が生じていないか事後の検証が不可欠である。効果検証の結果を踏まえて考察し、次の施設整備へ繋げていく仕組みづくりが必要である。

(3) 有効なワークショップの運営

施設整備の計画段階、設計段階、施工段階の進捗状況に応じて意見交換のポイントを絞ることが重要である。寄せられた意見及びその意見に対する対応の可否や理由を明確に示し、透明性の確保が必要である。

また、立体模型や立体図面を用いて視覚障がい者に建物の形状・通路・建物内の構成をご理解いただけるように進めた。多様な障がい当事者が十分に内容を理解し、意見交換に参加できるよう、適切なツールを備えることが必要不可欠である。

(4) 意見集約と横展開の仕組みの構築

UDWS において議論・実施された取組のうち、高い評価を得た事例については、積極的に情報収集を行い、広く横展開することが重要である。こうした知見の蓄積と共有を通じて、より高品質な施設整備および運営の実現につなげていくことが求められる。

7. まとめ

本論文では、「大阪・関西万博日本館（仮称）UDワークショップ」の概要，成果および課題について報告した。

設計段階・施工段階を通じて合計 11 回開催し，延べ 54 名（設計段階 30 名，施工段階 24 名）の多様な障がい当事者および学識経験者の参画の下，設計段階 711 件，施工段階 182 件の意見を収集した。寄せられた意見は，スロープ・誘導設備やトイレをはじめとする施設各部の設計・施工内容に反映され，質の高いユニバーサルデザインの実現に寄与した。

本 UDWS で得られた知見と課題を踏まえ，計画段階からの当事者参画，ハード・ソフト一体的な議

論の枠組みの構築，および事後検証を含む PDCA サイクルの確立が求められる。

また，2025 年度に「建築プロジェクトの当事者参画ガイドライン²⁾」が示され，今後，一般庁舎も当事者参画の実施の促進が図られることになる。

本報告が，今後のユニバーサルデザインを目指した施設整備の一助となれば幸いである。

参考文献

- 1) 公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会：施設整備に関するユニバーサルデザインガイドライン【改定版】（民間パビリオン用），2022
- 2) 国土交通省：建築プロジェクトの当事者参画ガイドライン，2025